教育研究業績書

2024年10月22日

所属： 歴史文化学科　　資格： 准教授　　氏名： 井上　幸

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学	日本古代の文字表記,文字生活,漢字,異体字
学位	**最終学歴**
博士（文学）武庫川女子大学	武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻博士後期課程単位取得満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.教員免許状（専修・高等学校・国語）	2001年3月	
2.教員免許状（専修・中等学校・国語）	2001年3月	
3.学校図書館司書教諭	1999年3月	
4.図書館司書	1999年3月	
5.博物館学芸員	1999年3月	
6.教員免許状（普通一種・高等学校・書道）	1999年3月	
7.教員免許状（普通一種・中等学校・国語）、（普通一種・高等学校・国語）	1999年3月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.奈良文化財研究所平城宮跡資料館 展示補助業務	2008年度～2016年度	木簡展示「地下の正倉院展」の展示業務の補助。
2.奈良文化財研究所データベース開発補助業務	2008年度～2016年度	科学研究費補助金（課題番号20222002、基盤研究(S)「木簡など出土文字資料釈読支援システムの高次化と綜合的研究拠点データベースの構築」代表者渡辺晃宏、課題番号25220401基盤研究(S)「木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集」代表者渡辺晃宏）に関するデータベースの開発、改修、およびデータ作成、維持管理のための補助を行った。
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.東大寺諷誦文稿注解	共	2024年3月	上代文献を読む会編、和泉出版、A5、全頁数734。	担当：注釈67-74行pp.137～144、140-145行pp.273～281、204-209行pp.369～377、232-236行、267-272行pp.409～416、317-322行pp.556～564、379-384行pp.638～644
2.上代写経識語注釈	共	2016年3月	上代文献を読む会編、勉誠出版、A5、全頁数704。	担当：注釈pp.231～243奈良31別訳雑阿含経巻第十（五月十一日経）、注釈pp.424～434奈良71十誦律巻第十七（称徳天皇勅願一切経）、論考編pp.545～553写経識語の字形点描
3.〈歴史の証人〉木簡を究める	共	2014年8月	奈良文化財研究所編、発行、A5全頁数208。	担当：pp.111～132「木簡と文字－データベース、木簡の文字」
4.音声資料による中国人日本語学習者の中間言語の基礎的研究	共	2009年2月	李晨、井上幸、李明姫編、吉林大学出版社、B5全頁数291。	担当：pp.3～224調査概要と文字化テキスト、pp.239～289誤用分析
5.『高橋氏文』注釈	共	2005年3月	上代文献を読む会	担当：pp.106～115の月令1-6注釈

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
6.『世俗諺文』出典索引ならびに一字索引	共	2001年3月	編、翰林書房、A5全頁数285。武庫川女子大学西崎研究室発行、B5全頁数181。	担当：pp.1～123索引編
2 学位論文				
1.日本古代の文字生活試論	単	2006年3月	武庫川女子大学	
3 学術論文				
1.漢字からみる上代の文字生活―木簡の所用漢字を中心に―	単	2023年4月	『上代文学』130号、上代文学会、A5、pp.1-15	前稿の調査結果に、その後公開された木簡データを追加し、所用漢字の異なり字数とのべ字数を計上した。また、記紀万葉、続日本紀などの所用漢字に関する先行研究の調査結果を援用し比較した。この他、千字文、現代の常用漢字表所用漢字との比較も試みた。
2.「基礎能力（コミュニケーションの基礎）」科目の授業改善にむけた予備的検討－ルーブリックの導入と学生の意識調査を中心に－	共	2022年3月	『高等教育推進センター紀要』第７号、流通科学大学高等教育推進センター、pp.75-91	共著者：中島美佐穂、井上幸〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉 1年生前期開講「基礎能力（コミュニケーションの基礎）」科目の授業改善の取り組みとして、ルーブリックを作成し、その概要説明と、作成、導入に際して、学生自身のコミュニケーションに対する意識調査や使用実態を調査し、導入の際の注意を考察した。
3.日本古代の所用漢字についての一考察(2)木簡、『古事記』と平安時代漢字文献との比較から	単	2020年3月	『ASIA―社会・経済・文化―』東大阪大学アジアこども学科、7号、A5、pp.294～287	前稿の調査結果に加え、既存の平安時代の漢字文献についての研究結果を参考にして、木簡と『古事記』の所用漢字を比較したもの。
4.日本語ライティング授業での書き言葉への書き換え練習について	共	2020年3月	『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』東大阪大学、17号、A4、pp. 39～47	共著者：井上幸、樺沢綾〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉 当時の本務校短期大学部実践保育学科の国語表現関連の授業で実践した書き言葉への書き換え練習についての実践報告。
5.日本古代の所用漢字についての一考察―木簡と『古事記』との比較から―	単	2019年3月	『ASIA―社会・経済・文化―』東大阪大学アジアこども学科、６号、A5、pp.256～242（縦組pp.15～29）	『古事記』と木簡の使用漢字について、異なり字、使用頻度から比較したもの。また、相違するものについて若干の考察を加えた。
6.「伝統的な言語文化」としての日本古代の漢字文化―習書木簡からの学習素材の探求	単	2019年3月	『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』東大阪大学、16号、A4、pp. 41～48	小学校国語科での「伝統的な言語文化」に関する事項に対し日本古代の習書木簡など漢字文化に親しみを惹起できる素材を提案。
7.『新撰字鏡』掲出字と日本古代の木簡の字形比較試論	単	2019年3月	『ASIA―社会・経済・文化―』東大阪大学アジアこども学科、５号、A5、pp.192～180（縦組pp.31～43）	平安初期の音義書『新撰字鏡』に掲出される漢字の字形と日本古代の木簡の代表的な字形を比較。
8.ベトナム人留学生の漢字字形誤用例の収集	単	2019年3月	『JSL漢字学習研究会誌』JSL漢字学習研究会、11号、B5、pp. 67～74	非漢字圏留学生の書字について、前稿の誤用一覧に調査資料を追加し、分析したもの。
9.古代の漢字字体からみた仮名	単	2019年3月	『第14回若手研究者支援プログラム報告集「仮名文字―万葉仮名と平仮名―」』奈良女子大学古代学・聖地	本プログラムのテーマ（報告書タイトルに同じ）のもと、古代の漢字使用の実態〈主に字形・字体〉について報告し、7・8世紀の木簡での大きな省略で仮名にみえる例などから、仮名創出までの連続面と不連続面について言及した。その他各先行研究の紹介と事象の例証を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			学センター編、A4、pp. 51～71	
10.ベトナム人留学生の書字について―漢字字形の誤用例抽出―	単	2019年3月	『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』15号、東大阪大学、A4、pp. 67～74	本務校に留学する日本語学習者の漢字書字能力に関し、漢字の筆画において発生する誤用例を収集し、誤用のパターンを掲載した。特に、非漢字圏学習者の文字認識の特徴として、創作、画数脱落、画数過剰が上位を占めた。非漢字圏学習者の文字認識の一端を明らかにした。
11.東大阪大学日本語学習者の動機と自己評価の変化について	共	2018年3月	『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』15号、東大阪大学、A4、pp.37～42	共著者：栖原有真人、井上幸、三成清香〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉本務校に留学する日本語学習者の動機アンケート結果の分析をもとに、自己評価の結果内容の考察と、対象時期に２度行ったアンケート結果の比較を行った。学習動機、意欲とその背景、および今後の課題ににについて論じた。
12.古代の習書木簡における練習背景点描－当時の使用字体からの推測－	単	2018年3月	『ASIA―社会・経済・文化―』東大阪大学アジアこども学科、４号、A5、pp.192～180（縦組pp.31～43）	習書木簡において、特に字形の類似から同一木簡に練習されたとみられるものについて、当時の使用字体の分析により、当時の人びとの筆画の認識（特に類似関係）を考察し、その習書の背景を推測したもの。
13.字形画像をキーとした情報検索による古文書デジタルアーカイブ活用への効果	共	2018年2月	『情報処理学会論文誌』59巻2号、情報処理学会、A4、pp. 351- 359、共著者：耒代誠仁、高田祐一、井上幸、方国花、馬場基、渡辺晃宏、井上聡〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉	木簡くずし字解読システムMOJIZOに実装された、画像による類似字形検索の特徴と古文書デジタルアーカイブ活用への効果を論じたもの。
14.一次資料としての出土漢字	単	2017年7月	『古代の文字文化』（古代文学と隣接諸学４）犬飼隆編、竹林舎、A5、pp. 398～425	一次資料として主に木簡をとりあげ、漢字に関する諸課題（所用字種、字形、習書木簡の事例等）について紹介し、一次資料がもつ情報量と性質など、国語学的見地から説明したもの。
15.木簡およびくずし字のデジタルアーカイブを文字画像で検索するサービスの実装	共	2016年12月	『人文科学とコンピュータ論文集(じんもんこん2016)』情報処理学会、A4、pp.19～24	共著者：耒代誠仁、井上幸、高田祐一、方国花、馬場基、渡辺晃宏、井上聡。〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉木簡くずし字解読システムMOJIZOのWEBサービス部分開発の経緯、内容、課題等について論じたもの。
16.16 歴史的文字分析と字体情報―木簡の事例収集と分析	共	2016年11月	『漢字字体史研究二字体と漢字情報』石塚晴通監修、馬場基、高田智和編、勉誠出版、A5、pp.109～140	共著者：井上幸、方国花。執筆部分pp.109～118、123～124、127～130。木簡の字体情報として、時期的な違いなど、字形のもつ情報について、諸例を挙げたもの。また、字体研究での試みとして、木簡の字形と後世の字書の字体注記との対照結果などについて述べた。
17.解移牒符案にみえる訂正方法とその記号について	単	2016年6月	『日本古代の長大帳簿―解牒符案の研究―』栄原永遠男編、和泉書院、A5、pp. 199～211	正倉院文書のうち、解移牒符案４種、約500通から、約780箇所に施された訂正を収集し、分類、挙例したもの。なかでも、小書きで傍記するものや重書が多用されることがわかった。
18.古代木簡研究におけるデジタルデータの整理と集積	単	2014年5月	『人文科学とコンピュータ論文集(じんもんこん2014)』2014-11、情報処理学会、A4、pp.1-4	木簡に関わる科研での取り組み、およびこれまでの木簡データ整理作業で行われてきたデジタル情報の整理・集積について実践例を紹介した。
19.日本古代の文字資料	単	2013年12月	『武庫川国文』77	成立時期と写本の書写年代との距離をはかるべく、写本間の校合だ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
と写本の字形をめぐって―真福寺本『古事記』の例を試みに―			号、武庫川女子大学国文学会、A5、pp.67～73	けでは得にくい、各々の字形の背景を、木簡や正倉院文書によって確認することへの試み。
20.個別DBの深化と連携確保をめぐって	共	2013年1月	『人文科学とコンピュータ論文集(じんもんこん)2013』情報処理学会、pp.1-4	共著者：馬場基、渡辺晃宏、井上幸、中川政樹、耒代誠仁。〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉作成されたデータベースをより深化させること、及び他機関を含め、他のデータベースと連携するための方策について実践、検討したもの。
21.飛鳥藤原京と平城京出土木簡の所用漢字一覧（稿）	単	2012年10月	『文化財論叢Ⅳ―奈良文化財研究所創立60周年記念論文集』奈良文化財研究所、B5、pp.567～584。 のち、市販版2013年4月『文化財学の新地平』吉川弘文館。	飛鳥・藤原京および平城京出土（奈文研調査分）木簡所用の漢字を、使用頻度とともに一覧表にし、常用される漢字が他の資料と比べてもかなり偏りがあることなど、考察を加えた。
22.日本古代の使用字体と中国の字書における字体注記との関わりをめぐって２―飛鳥・藤原京、平城京木簡と『干禄字書』を中心に	単	2012年10月	『水門―言葉と歴史』24号、水門の会、勉誠出版、A5、pp.115～126	前稿正倉院文書（食口案・献物帳）と写経の所用字体での調査結果をふまえ、さらに木簡の例を加え報告したもの。木簡においても、前稿と同様に、中国字書『干禄字書』に照らすと、「正字」以外の「俗・通」字に属する場合が多かったことが確認できた。
23.出土文字資料の画像データベースの構築	共	2012年6月	『奈良文化財研究所紀要2012』奈良文化財研究所、A4、pp.54～55	共著者：渡邉晃宏、馬場基、井上幸〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉一般公開された画像データベース『木簡字典』などの構築についての報告と課題の検討。
24.古代日本の文字資料にみられる筆順について―異体字形成の背景をめぐって	単	2011年3月	『東アジア日本語教育・日本文化研究』14号、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、A5、pp.1～12	主に奈良時代の文字資料から、筆順をさぐり、そのバリエーションを紹介した。筆順によって省略可能になる画についてなど、異体字の発生の背景をさぐる一視点としても考察した。 〈東アジア日本語教育・日本文化研究学会　奨励賞受賞論文〉
25.論日本古代文字資料中的減画－以借筆為中心〈中国語〉	単	2010年6月	『文字学論叢』第５輯、中国文字学会、向光忠編、線装書局、A5、pp.475～482	金石文等の調査結果をふまえ、木簡の事例を加え報告し、木簡においても同様に、輪郭をとらえるという文字認識が確認できることを報告したもの。 日本語題目：日本古代の文字資料にみられる減画について―借筆を中心に―
26.漢字の部分の位置・配分の交替に関する異体字点描―日本古代の木簡の例を中心として	単	2010年6月	『水門－言葉と歴史』22号、水門の会、勉誠出版、A5、pp.26～32	漢字の部分の位置や配分の大小を換えたりする異体字を取り上げ、主に奈良時代の平城京出土木簡を調査、事例を紹介した。当時の文字認識の一つとして、部分が揃っていればその字であると認識していたことがわかった。
27.様態を表す接続表現「て」「ながら」「まま」の習得について(2)－形容詞連用修飾用法を中心に	単	2010年3月	科研報告書『中国語話者のための日本語教育文法の開発と学習者中間言語コーパスの構築』A4、pp.7～14	特に「て」の過剰使用には形容詞連用修飾の場合が多く関連し、他の用法との混用が見られること、学習時から定着の過程において混用される可能性も指摘した。〈科研基盤研究(C)、課題番号19520451、代表者杉村泰〉
28.日本古代の漢字使用にみられる借筆による減画をめぐって	単	2009年4月	『水門－言葉と歴史』21号、水門の会、勉誠出版、A5、pp.86～94	借筆という、近接する筆画を併合して、1、2画を減じる事例を紹介。主に金石文や正倉院文書の例から、当時の文字認識の一つとして、細部は併合しても、全体の輪郭をとらえ、その字であると認識されていた可能性を指摘。
29.日本語会話音声資料の整備と中国語母語話者の誤用例につい	共	2009年3月	『東アジア日本語教育・日本文化研究』12号、東アジ	共著者：井上幸、李明姫〈共同研究により執筆箇所抽出不可能〉日本語学習者会話コーパスの作成過程でみえた音声資料の整備における課題や誤用例についての課題について報告した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
て			ア日本語教育・日本文化研究学会 A5、pp.311～324。	
30.日本古代の漢字使用にみられる類化による偏旁冠脚の添加・置換をめぐって―正倉院文書の例を中心に	単	2008年12月	『美夫君志』77号、美夫君志会、A5、pp.30～40	筆画の増減関係による異体字のうち「類化」という意味の連想や上下左右の文字の一部に牽引されて偏旁冠脚などを添加や置換し増画する現象に焦点をあて、「正倉院文書」の事例を紹介した。
31.日本古代の使用字体と中国の字書における字体注記との関わりをめぐって―正倉院文書・写経資料と『干禄字書』『正名要録』を中心に	単	2007年12月	『安達隆一先生古稀記念　ことばの論文集』安達隆一先生古稀記念論集編集委員会、おうふう（非売品）、A5、pp.19～34	正倉院文書（食口案・献物帳）と写経の所用字体を中国の字書の字体注記と比較し、日本の使用字体は中国の「正字」体ではない場合が多いことを指摘した。
32.写経・正倉院文書（食口案・献物帳）の所用字体をめぐって	単	2007年12月	『国語文字史の研究』10号、国語文字史研究会、和泉書院、A5、pp.89～100	写経と正倉院文書（食口案・献物帳）の各所用字体について字体種類数と各字体の共通性から比較検討し、字体種類数が最も少ないのは食口案、共通する字体が多いのは写経と献物帳であり、写経と食口案の場合が少ないことを指摘した。
33.写経・正倉院文書（食口案・献物帳）の所用字体をめぐって２―隋唐経との対照から―	単	2007年11月	『武庫川国文』70号、武庫川女子大学国文学会、A5、横pp.72～61	写経と正倉院文書（食口案・献物帳）の各所用字体についての調査をふまえ、さらに中国隋唐経の所用字体を比較し、大部分はほぼ同じ使用字体であったが、献物帳では、他で使用される字体を回避し、わざわざ煩雑な字体を用いるなどの特徴を見出した。
34.広告文における表現に対する学習者の理解についての実践報告―不特定多数に対する行動要求表現の使用例から―	単	2007年9月	『日本文化論叢〈第四届中日韓文化教育研究国際検討会論文彙編〉』劉利国主編、大連理工大学出版社、A5、pp.277～291	行動求表現の習得では、特に広告文など不特定多数への呼びかけで、「お…下さい」の表現の使用が難しいこと、また待遇表現の一環として対象の把握ができるように指導すべきであると指摘した。
35.様態を表す接続表現「て」「ながら」「まま」の習得について(1)－使用実態報告―	単	2006年8月	『中国日語教育理論与実践研究』李晨編、吉林大学出版社、A5、pp.264～274	中国在住学習者（勤務校）の録音資料およびKYコーパス中国語母語話者例を用いた使用実態報告。「て」の過剰使用、「ながら」の定着度の高さ、「まま」の使用頻度の少なさを指摘した。
36.パラフレーズ練習の実践報告	単	2006年3月	『東アジア日本語教育・日本文化研究』９号、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、A5、pp.77～90	上級学習者におけるパラフレーズ練習の授業実践と効果、問題点を報告。特に既習事項の復習、類義語や類義表現の習得に役立つことを指摘した。
37.古代日本における『文字辨嫌』の存在意義少考―はつがしらの字形をめぐって―	単	2005年11月	『武庫川国文』66号、武庫川女子大学国文学会、A5、pp.77～83	『文字弁嫌』の資料について、日本古代の漢字学習および辞書史における意義を提示した。例えば“はつがしら”は他の資料でも、「祭」上部との混用が多く、本資料のような、似た字形・音を示す字書の存在意義が大きいことを指摘した。
38.古代の「明」字形をめぐって―正倉院文書の例を中心に	単	2004年11月	『武庫川国文』64号、武庫川女子大学国文学会、A5、pp.75～82	奈良時代の「明」字の異体字について、使用頻度が高く通用している字体が「目」偏の場合であることを、正倉院文書において確認した。
39.『文字辨嫌』の掲出字の字形と音注について	単	2003年11月	『武庫川国文』62号、武庫川女子大学国文学会、A5、pp.45～53	正倉院文書所収の『文字弁嫌』の掲出字の字形と音注との食い違いを精査することによって、書写状況を考察し、正式的に書写されたものではなく抄出である可能性を指摘した。
40.音節結合からみた古	単	2002年11月	『武庫川国文』60	正倉院文書にのこる戸籍の文字調査を行い、音節結合法則が成り立

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
代戸籍の借音仮名			号、武庫川女子大学国文学会、A5、pp.191～205	ちにくく、「記紀万葉」内で成り立っていた可能性が高いことを指摘した。
41.古代戸籍の借音・借訓仮名にみられる音の結合と使用法について	単	2002年6月	『水門－言葉と歴史』20号、水門の会、A5、pp.9～17	仮名の使用法を音節結合の法則に準じているかを調査し、法則の例外が多くあることを指摘した。
42.『古事記』所用の借音仮名―「加」「迦」の再検討	単	2000年11月	『鳴尾説林』8号、武庫川女子大学日本文学研究会、A5、pp.40～49	『古事記』の借音仮名を当時の漢字音体系から見直し、「加・迦」2字は従来「カ」と読まれてきたが、「ケ」の可能性があることを証明した。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.合字の諸相―日本古代の木簡の例を中心に―	単	2024年9月23日	第49回表記研究会（ZOOM）	
2.漢字からみる上代の文字生活（シンポジウム基調発表）	単	2022年11月26日	上代文学会秋季大会シンポジウム（於早稲田大学+ZOOM）	プログラム名「テキストの中の文字―上代文献と表記の位相―」
3.万葉集の熟字	単	2021年4月11日	美夫君志会例会（於中京大学）	
4.『古事記』の使用漢字についての一試論―木簡の使用漢字との比較から―	単	2019年8月30日	古事記学会関西例会（於甲南女子大学）	
5.ベトナム人留学生の漢字字形誤用例の収集	単	2018年9月1日	第76回　JSL漢字学習研究会（於東大阪大学）	
6.古代の漢字字体からみた仮名（シンポジウム基調発表）	単	2018年8月27日	奈良女子大学 古代学・聖地学研究センター主催、第14回若手研究者支援プログラム（於奈良女子大学）	プログラム名「仮名文字　万葉仮名と平仮名」
7.日本古代の木簡にみえる習書の筆画について	単	2018年1月20日	第39回表記研究会研究発表会（於清泉女子大学）	
8.日本古代の木簡と『新撰字鏡』掲出字の字形比較試論	単	2016年7月3日	2016年度美夫君志会全国大会研究発表(於中京大学)	
9.日本古代の木簡と『新撰字鏡』掲出字の字形比較	単	2015年8月23日	東アジア日本語教育・日本文化研究学会（於西南学院大学）	
10.奈良時代の都城木簡の字形について―『新撰字鏡』掲出字形との比較を手がかりに―	単	2014年9月28日	第30回表記研究会（於　関西大学）	
11.古代木簡研究におけるデジタルデータの整理と集積	単	2014年5月31日	情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ研究会報告（於桜美林大学）	
12.日本古代の木簡の字形をめぐって―都城	単	2013年10月26日	2013年度 第45回秋季国際学術大会(於	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
と地方木簡の比較から			南ソウル大学）	
13.飛鳥藤原京木簡と平城京木簡の字形比較一筆画の省略を中心に一	単	2012年11月11日	東アジア日本語教育・日本文化研究学会（於天理大学）	
14.万葉集巻七の漢字と表記について	単	2012年9月8日	美夫君志会、美夫君志ゼミナール（於旅館かう楽）	
15.論日本古代（飛鳥藤原京・平城京）簡牘中的字形（中国語）	単	2012年7月24日	紀念・徐鉉徐鍇暨第６届中国文字学国際学術研討会（於中国・揚州市、揚州会議中心）	
16.《干禄字書》中字体標記的字体与日本古代文字資料字体的対比分析（中国語）	単	2011年7月30日	中国文字学会第６届学術年会、主催中国文字学会、（於　中国･張家口市、張家口賓館）	日本語題目：『干禄字書』にみられる字体注記の字体と日本古代の文字資料にみられる字体の比較分析
17.真福寺本『古事記』と日本古代の文字資料に見られる字形をめぐって	単	2011年4月23日	韓国日本文化学会第39回国際学術大会（於　韓国･白石大学校）	
18.古代日本の文字資料にみられる筆順について一異体字形成の背景をめぐって	単	2010年10月30日	第14回東アジア日本語教育・日本文化学会（於中国･瀋陽師範大学）	
19.論古代日本文字資料中的筆順（中国語）		2010年8月13日	第５届中国文字学学術研討会、主催中国文字学会、（於中国･南開大学）	日本語題目：日本古代の文字資料にみえる筆順について
20.万葉集の写本と古代文字資料の所用字体をめぐって	単	2009年9月27日	第30回万葉語学文学研究会、（於奈良女子大学）	
21.日本古代文字資料中草書楷化字形的使用状況（中国語）	単	2009年8月21日	中国文字学会第５届学術年会及漢字学国際学術研討会、主催中国文字学会、（於中国･武夷山市、武夷山荘）	日本語題目：日本古代の文字資料にみえる草書の楷書化字形の使用状況について
22.日本語会話音声資料の整備と中国語母語話者の誤用例について	共	2008年10月26日	第12回東アジア日本語教育・日本文化学会（於日本大学）	共同発表者　井上幸、李明姫
23.論日本古代文字資料中的減画－以借筆為中心(中国語)	単	2008年8月2日	第4届中国文字学国際学術研討会、主催中国文字学会(於中国･魯東大学)	日本語題目：日本古代の文字資料にみられる減画について一借筆を中心に一
24.日本古代の漢字使用にみられる類化による偏旁冠脚の添加・置換をめぐって一正倉院文書の例を中心に	単	2008年7月6日	2008年度美夫君志会全国大会研究発表、(於中京大学)	
25.様態を表す接続表現「て」「ながら」「まま」の習得につ	単	2006年9月24日	2006日本語言文化教学与研究国際学術研討会主催中国	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
いて(2)－形容詞連用修飾用法を中心に			日語教学研究会、（於 中国･吉林大学）	
26.広告文における表現に対する学習者の理解についての実践報告―不特定多数に対する行動要求表現の使用例から―	単	2006年9月17日	第四回中日韓文化教育研究フォーラム、主催大連外国語大学、中国日語教学研究会大連分会、（於 中国･大連外国語大学）	
27.正倉院文書の文字使用について	単	2006年9月2日	国際シンポジウム「世界における日中文化と文学」主催東北師範大学、早稲田大学（於中国･東北師範大学）	
28.様態を表す接続表現「て」「ながら」「まま」の習得について(1)－使用実態報告―	単	2006年6月24日	中国日語教育理論与実践研究研討会、主催魯東大学、(於中国･魯東大学)	
29.パラフレーズ練習の実践報告	単	2005年11月12日	第9回東アジア日本語教育・日本文化学会(於別府大学)	
３．総説				
1.木簡と万葉集	単	2021年4月	『万葉集の基礎知識』上野誠、鉄野昌弘、村田右富実編、角川書店、A5、全頁数453。	担当：pp.235～239
2.万葉集の文字	単	2019年5月	『万葉をヨム』上野誠、大浦誠士、村田右富実編、笠間書院、A5、全頁数244。	担当：pp. 178～192
3.〈新聞コラム〉万葉集の漢字のなぞなぞ	単	2016年9月25日	読売新聞（奈良版）	奈良文化財研究所連載「探検奈文研」第153回（本シリーズは、2021年3月に書籍版〈奈良文化財研究所編〉として刊行）
4.〈新聞コラム〉誤字脱字	単	2015年6月28日	読売新聞（奈良版）	奈良文化財研究所連載「探検奈文研」第109回（本シリーズは、2021年3月に書籍版〈奈良文化財研究所編〉として刊行）
5.〈新聞コラム〉習書の文字	単	2015年5月17日	読売新聞（奈良版）	奈良文化財研究所連載「探検奈文研」第103回（本シリーズは、2021年3月に書籍版〈奈良文化財研究所編〉として刊行）
6.〈新聞コラム〉柿本人麻呂	単	2014年10月17日	朝日新聞（奈良版）	奈良文化財研究所連載「飛鳥むかしむかし」第59回（本シリーズは『飛鳥むかしむかし（国づくり編）』（朝日新聞出版、2016年10月刊）として刊行）。
7.〈新聞コラム〉文字の上手下手	単	2014年3月9日	読売新聞（奈良版）	奈良文化財研究所連載「探検奈文研」第46回（本シリーズは、2021年3月に書籍版〈奈良文化財研究所編〉として刊行）
8.〈図録〉木簡の文字	単	2010年10月	『天平びとの声をきく―地下の正倉院展―』奈良文化財研究所発行（平城宮跡資料館）	担当pp.88～89
9.〈図録〉「日本語表記にかかわる木簡」	単	2010年10月	『木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち』奈良文化財研究所(飛鳥資料館)発行	担当pp.64～65
10.〈新聞コラム〉奈良時代の漢字		2010年2月15日	朝日新聞（奈良版）	奈良文化財研究所連載「古代はいま」第88回
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.〈講座〉木簡・遺物に残された文字	単	2023年6月17日	武庫川女子大学言語文化研究所	言語文化研究所セミナー「文字のかたち、文字の意義」のテーマのもとに、表題について、木簡やその他の文字資料を紹介し、特に木簡の所用漢字や万葉仮名用法のみられる木簡などを紹介した。
2.〈研究ノート〉「基礎能力（コミュニケーションの基礎）」科目のルーブリック実施報告 ：学生の自己評価を中心に	単	2023年3月	『高等教育推進センター紀要』第8号、流通科学大学高等教育推進センター、pp.139-148	1年生前期開講「基礎能力（コミュニケーションの基礎）」科目で2022年度より導入したルーブリックについて、その実施概要と学生の自己評価についてのアンケート結果を集計したもの。
3.〈講座〉古代の所用漢字ー木簡の例を中心にー	単	2023年1月23日	三郷町みさと万葉学習会、於奈良県三郷町文化センター	
4.〈研究ノート〉古代の習書木簡における練習背景点描(2)類似する漢字の部分からの推測	単	2021年3月	『比治山大学紀要』27号、pp.119～123	習書が続く漢字列に対し、その漢字の類似する部分に注目し、研究ノートとして、典型的な事例を数点取り上げた。
5.〈講座〉木簡にみえる辞書の記述と漢字学習について	単	2021年1月22日	三郷町みさと万葉学習会、於奈良県三郷町文化センター（事前収録の動画による）	
6.〈教育活動報告文〉絵本の文字表現と解釈ー吉田佳広『文字の絵本ー風の又三郎ー』よりー	単	2020年3月	『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』東大阪大学、17号、A4、pp. 55～59	タイトルの絵本は文字を情景、心情にあわせ、文字をデザインして表現されたもので、小学校国語科での教材としての可能性を模索した。
7.〈講座〉日本古代の木簡と漢字	単	2019年7月26日	第35回漢文教育研修会教養講座、全国漢文教育学会主催、於湯島聖堂内斯文会館講堂	
8.〈講座〉木簡にみえる韻文	単	2019年1月18日	三郷町みさと万葉学習会、於奈良県三郷町文化センター	
9.〈講座〉日本古代の木簡の文字と韻文	単	2018年3月21日	新潟県漢詩連盟他周年事業講演会、於三条市諸橋轍次記念館	
10.〈講座〉古代の日本語と東アジアの漢字文化	単	2018年2月9日	東大阪市連携6大学公開講座、於男女共同参画センター・イコーラム	
11.〈講座〉中国大陸からきた漢字と日本古代の漢字学習	単	2017年11月18日	東大阪大学公開講座、於東大阪大学	
12.〈講座〉木簡の文の表記と万葉集の歌の表記について	単	2017年1月17日	三郷町みさと万葉学習会、於奈良県三郷町文化センター	
13.〈講座〉日本古代の木簡にのこった古典文	単	2016年6月13日	大阪府立大学2016年度府民教養講座、於大阪府立大	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
14.〈講座〉木簡の文字をたずねて	単	2015年8月29日	学I-siteなんば大阪府柏原市歴史資料館、木簡展示「木簡紀行」関連講演会	
15.〈講座〉古代の人と文字ー日本古代の木簡を中心にー	単	2015年3月8日	美夫君志会例会開放講座、B万葉集各論、於中京大学	
16.〈講座〉万葉集と木簡にみえる古代の文字生活	単	2015年1月16日	三郷町みさと万葉学習会、於奈良県三郷町文化センター	
17.〈講座〉日本古代の木簡に書かれた漢字	単	2014年9月13日	三条市諸橋轍次記念館、講演会名「漢字研究の最前線－木簡と人名の漢字について－」	
18.〈講座〉木簡と文字－データベース、木簡の文字	単	2013年9月22日	奈良文化財研究所主催、講演会名「〈歴史の証人〉木簡を究める」、於東京有楽町朝日ホール	
19.〈翻訳中国語→日本語〉遺物の集合撮影の実践と研究〈原著者　王蔚波〉		2009年9月	『埋文写真研究』vol.20（B5、P4～P9）埋蔵文化財写真技術研究会	
６．研究費の取得状況				
1.〈分担〉史的文字字形通覧基盤に基づく史的文字の字形情報記述法の確立		2024年6月28日～	挑戦的研究(萌芽)、代表者高田智和	https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-24K21368/
2.〈分担〉木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集		2017年～2018年3月31日のみ分担	基盤研究(S)、代表者渡辺 晃宏、2013-05-31 - 2018-03-31	https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-25220401/
3.古代日本の木簡と古辞書掲出字の字形比較		2015年度	奨励研究	https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-15H00011
4.飛鳥藤原京・平城京木簡と古代の地方木簡の字形比較		2013年度	奨励研究	https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-25902007
5.平城京木簡と飛鳥藤原京木簡の字形比較		2012年度	奨励研究	https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-24902005
6.木簡の字形分析による日本古代の異体字の基礎的研究		2009年～2010年度	研究活動スタート支援	https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-21820081/

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2023年5月～現在	上代文学会 理事
2.2012年6月～現在	美夫君志会 理事 日本語学会、訓点語学会、上代文学会、万葉学会、美夫君志会、古事記学会、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、全国大学国語国文学会、表記研究会、日本漢字学会、正倉院文書研究会、木簡学会、日本語教育学会、中国語母語話者のための日本語教育研究会、ＪＳＬ漢字学習研究会